

# 福重有機米研究会（大村市）

## 地元で農業で元気を

### 組織の概要

代表者：会長 中川 利幸

経営形態：農業者グループ

構成員数：7名

活動内容：有機農業

取組面積：3ha

取組作物：水稻

（ヒノヒカリ）



### 困難も自ら切り拓く

消費者からの声に応えるべく、地域の有志が集い取組を始めました。しかし、経験者不在のため、生産が安定しないなど、何度も壁に当たりましたが、試行錯誤を繰り返し、10年以上の歳月を経て安定生産ができるようになりました。

メンバー一同、これからも消費者の声に応えながら、地域を元気にしていきたいとのことです。



### 取組のきっかけ

#### 全ては消費者のため

まだ食糧制度であった昭和63年頃、地元の消費者からの「何故、大村に住んでるうちらが、大村の米を食べられんと？」という声を聞き、それに伝えるために有志が集い、ヤミ米にしないために有機農業で始めたことがきっかけとなっています。

なお、有機農業ですが、周辺ほ場からの農薬の飛散の心配があるため、あえてJAS認定は受けていないとのことです。



### 特徴的なこと・苦労していること

#### 様々な病害虫対策

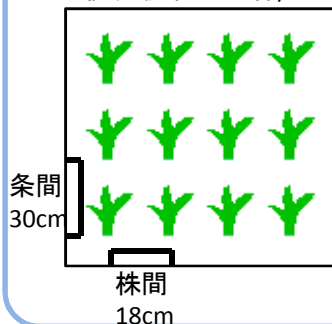
有機農業ということで、農薬散布はできませんので、当初は病害虫対策にはかなり苦労したとのことです。

そこで、まず取り組んだのが、疎植にして風通しを良くし、また、生育ステージに応じた深水管理をすることで、ほとんどの病害虫を防げるようになったとのことです。

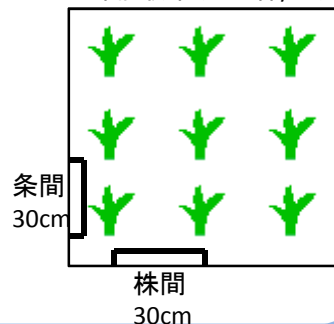
更に、畦の草刈りを黄熟期まで行わないことで、カメムシがほ場へ進入することを防止でき、斑点米が少なくなったとのことです。

なお、以前は除草のため「合鴨」や「鯉の稚魚の放流」もやっていたそうですが、合鴨が逃げたり、鯉がサギに食べられたりしたので、今は取り組んでいないとのことです。

慣行栽培 (18.5株/m<sup>2</sup>)



疎植栽培 (11.1株/m<sup>2</sup>)



## 消費者との交流や農産物販売

### 交流から生まれる連帯感

研究会と消費者は、地区の公民館に料理を持ち寄り、お酒を酌み交わす情報交換を定期的に行っています。これによって、相互に求めている情報を知ることができるという連帯感が生まれています。

また、メンバーの間でも、お互いのほ場で病害虫の発生など異常を発見したら速やかに連絡しあう体制が構築され、被害を最小限に抑えています。

### 注文が殺到！！

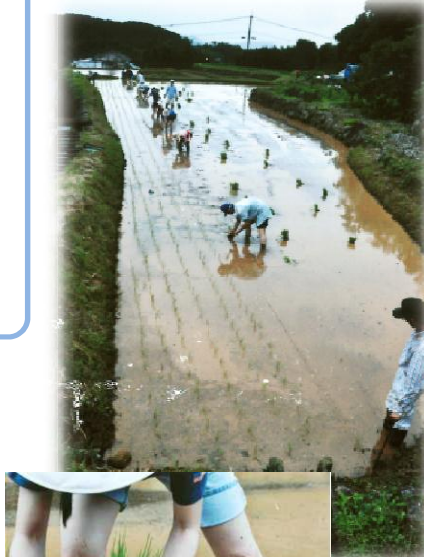
生産されたお米は、市内のレストランや保育所、直売所等との契約販売が基本となっていますが、評判を聞きつけた消費者が「買いたい」と連絡あるそうですが、注文が多すぎて希望に添えない場合もたまにあるとのこと。

## これからの抱負

### 夢は大きく

収量は豊作年で480kg/10a程度と、慣行栽培とほぼ同等の技術力を習得した研究会のメンバーですが、まだレベルアップできると確信しています。

そのためにも、近隣に農地があれば借りて規模拡大を図るとともに、同じ志を持ったメンバーも増やしたいとのこと。



## 取り組む人へのアドバイス

### 技術は確立から継承へ

無農薬・無化学肥料栽培で同等の収量があるのかと疑問に思うかもしれませんが、そこには苦難に立ち向かった経験があって、確立された技術があります。

研究会は、農業で地域を元気にしたいと常々思っています。よって、確立された技術は自分たちに留めることなく、近隣農家へも継承していきたいとのこと。

水稻の有機農業に興味を持った方、一緒に始めてみませんか。

